

No. 1052

春を呼ぶ

—火渡り祭—

山深い高尾の里に春をつける3月、東京の代表的ハイキングコースのひとつ高尾山には、このところハイカーの姿がめっきりふえました。

小鳥がさえずり、花が咲き乱れる3月10日、春山開き、といわれる薬王院の「火渡り祭」が行なわれました。山と積まれた薪に火が放たれ祈とうの声が高まる中を山伏が素足で火を渡るこの行事は約600年の伝統を持つ高尾山の山伏たちの「火の行」。身のけがれを除き無病息災を祈願する 荒業中の荒業です。この祭りがすむと高尾山には本格的な春のハイキングシーズンがやってきます。

小野田さん30年目の帰還

フィリピン・ルパン島で救出された元日本兵、小野田寛郎元少尉(51)は、三十年ぶりの戦いを終えて三月十二日。午後四時三十分、日航特別機で羽田空港に帰ってきた。タラップの上で満面に笑みをたたえ高々と手を振る小野田さん、昭和十九年二十二歳の若さで日の丸に送られてフィリピンへ、そして三十年、初老の紳士のような風ぼうで帰還。出迎えた老父母——しかし、タラップをおりてすぐ対面できたわけではなかった。しゃしゃり出た各党代表や外務省関係者の列にはばまれ、はるか後方にその姿は追いやられていた。——やっとかなった三十年ぶりの対面、無言の握手をかわす父と子、母、タマエさん(88)は「ヒロオ、よう生きて帰ってくれた。あなたはえらい、ありがとうございました」と労をねぎらった。

記者会見にのぞんで小野田さんは次のように語った。

——日本の敗戦はいつ頃知りましたか。

小野田「少佐殿から直接命令を降達されて初めて確認いたしました」

——山を下りるには絶対上官の谷口さんの命令が必要だったのですか

小野田「そうであります。軍の構成上、命令に従う、守るということは軍紀の一番の元をなすものです。命令がない限り、どんなこともできません」

——国民にむけてひとことごあいさつを

小野田「いかに命令と申しながら皆さんに多大な御迷惑をおかけしましてなんと申しあげようもありません。にもかかわらず、皆さんにこんなにたくさん私の帰りを喜んで下さって、言葉もありません」

午後六時過ぎ、新宿区戸山の国立第一病院に着いた小野田さんは、日本での久しぶりの夜を親子水いらずで過ごした。